

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

アナキスト地人論

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

エリゼ・ルクリュ

石川三四郎

アナキスト地人論

エリゼ・ルクリュの思想と生涯

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

目次

I 地人論（抄）

エリゼ・ルクリュ著 石川三四郎訳

序 12

地的環境論 16

労働論 79

歴史の分割とリズム 113

II エリゼ・ルクリュ——思想と生涯——

石川三四郎著

序文 146

人物 148

社会状勢 156

父母 161

社会思想・ベルリン留学 167

クーデタ、亡命 174

渡米中の生活 181

北米奴隷解放への寄与 195

結婚・旅行・観察 199

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

最初の大作	207
インタナショナルとパリ・コムミュン	
軍法会議の被告となる	217
世界新地理学の大成	225
爆弾事件、新大学創立	232
最後の傑作	241
彼の死	245
学者としてのルクリュ兄弟	248
菜食主義者	254
ブルードンとルクリュ	257
ヘルツェン、バクニン、クロポトキン	
最初の無政府主義的演説	264
人生観	278
投票は墮落の助成	285
革命の歴史的原則	289
美の革命	292
個人及び個人主義	296
君主制及び共和制の起源	299
泥棒と労働	304
エリゼ・ルクリュと暴力問題	307

アナキスト地人論

エリゼ・  
ルクリュの思想と生涯

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

一、本書第Ⅰ部の底本は、エリゼ・ルクリュ（Élise Rectus）著『地人論（第一巻・人祖論）』（石川三四郎訳、一九三〇年、春秋社）である。本書にはそのうち序文と三つの章を収録した。底本は原書の挿図類を半分以上省いて掲載してあるが、本書では全て省略した。原書（L'Homme et la Terre）初版は一九〇五年から一九〇八年にかけて六分冊四巻構成（分冊内に巻の区切りがある）で刊行された。なお、底本は一九四三年に『世界文化地史大系・第一巻』として再刊（有光社）されているが、この再刊は、訳文部分は初版の版（紙型）をそのまま使用したものである（誤植も初版のままに残っている）。

一、本書第Ⅱ部の底本は、石川三四郎著『エリゼ・ルクリュ——思想と生涯——』（一九四八年、国民科学社）である。底本中の「歴史のリズム」の章（「革命の歴史的原則」と「美の革命」の間の章）は、第Ⅰ部に収めた『地人論』の「歴史のリズム」の章からの抜粋であるので省略した。よって第Ⅱ部底本の章タイトルについていた番号は削除した。

一、本書は新漢字標準字体、新仮名遣いで表記した（第Ⅱ部の底本はもともと基本的に新漢字、新仮名遣い表記である）。片仮名語については長音符号に置き換える文字を長音符号に置き換え、平仮名語に長音符号が使われている場合は平仮名に置き換えた。

一、読み仮名ルビを補い、句読点、中黒点を多少加減した。送り仮名は現代風に加減した。

一、鉤括弧の用法は現今の慣例に従い統一した。また、子供／小供、ハシエット／アシエット、クーデタ／クー・デ・タ、溪谷／谿谷などの目立つ表記不統一を統一した。

一、底本では人名片仮名表記が現今一般的なものと異なる場合が少なからずあるが（例えば、ミシュレをミツシエレやミシエレと表記）そのままに表記した。また、底本ではフランス語大文字のアクサンは省く表記を採用しているが（ÉliseではなくÉliséとするなど）これもそのままに表記した。

一、Heinrich<sup>ハイリッヒ</sup>のような表記は、イェリッヒ（Heinrich）のように表記した。

一、（ ）括りの二行割註と〃ママ〃のルビは本書刊行所によるものである。



一、第一部底本では文献註が段落末に置かれていたが、本書では対応する文中に（＊）で示し挿入した。  
 一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にあるものを仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に左記の通り（送り仮名、活用語尾、踊り字の有無は代表例）。なお、「アジャ」「イタリ」「インディヤン」など現今あまり一般的でない表記に置き換えているものがあるが、これは底本中にその片仮名表記と漢字表記が混在しているため、底本中の片仮名表記に揃えたのである。

愛蘭、愛蘭土（アイルランド）、亞細亞（アジャ）、亞弗利加、阿弗利加（アフリカ）、亞米利加（アメリカ）、亞米利加印度人（アメリカインディヤン）、雖も（いえども）、些か（いささか）、伊太利（イタリー）、苟も（いやしくも）、愈々（いよいよ）、所謂（いわゆる）、況んや（いわんや）、印度（インド）、印度支那（インドシナ）、埃及（エジプト）、濠太刺利（オーストラリア）、和蘭（オランダ）、却て（かえて）、瓦斯（ガス）、曾て（かつて）、希臘（ギリシヤ）、基督（キリスト）、呉れる（くれる）、蓋し（けだし）、斯う（こう）、高架索（コーカサス）、茲、此処（ここ）、此の（この）、胡麻化す（ごまかす）、之、是れ（これ）、併し（しかし）、而も（しかも）、屢々（しばしば）、西比利亞（シベリア）、瑞西（スイス）、瑞典（スウェーデン）、蘇格蘭（スコットランド）、頗る（すこぶる）、乃ち（すなわち）、西班牙（スペイン）、其処（そこ）、其の（その）、抑も（そもそも）、夫れ、其れ（それ）、慥か（たしか）、啻に（ただに）、忽ち（たちまち）、仮令（たとひ）、西蔵（チベット）、丁抹（デンマーク）、独逸（ドイツ）、何う（どう）、玉蜀黍（とうもろこし）、兎に角（とにかく）、兎も角、とも角（ともかく）、弗（ドル）、何んな（どんな）、乃至（ないし）、尚お（なお）、乍ら（ながら）、就中（なかんずく）、為す（なす）、抔（など）、諾威（ノルウェー）、婆羅門（バラモン）、巴里（パリ）、只管（ひたすら）、法（フランス）、仏蘭西（フランス）、秘露（ベルギー）、白耳義（ベルギー）、伯林（ベルリン）、波蘭（ポーランド）、殆んど（ほとんど）、亦（また）、儘（まま）、寧ろ（むしろ）、若し（もし）、齋す（もたらず）、固より（もとより）、臆て（やがて）、耶蘇（ヤソ）、矢張り（やはり）、猶太（ユダヤ）、漸やく（ようやく）、歐羅巴（ヨーロッパ）、拉丁（ラテン）、羅馬（ローマ）、倫敦（ロンドン）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



エリゼ・ルクリュ  
(撮影ナダール)

SAMPLE  
Shoshi- sui.com

I  
地  
人  
論  
(抄)

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

エ  
リ  
ゼ  
・  
ル  
ク  
リ  
ユ  
著  
石  
川  
三  
四  
郎  
訳

## 序

数年以前、『世界新地理』という長い仕事の最後の行を書いた後、私は、何時か、地球上の諸地方で観察したような諸時代変遷上に於ける「人」を研究し、私の到達した社会学的結論を確立して見たい、という願望を表明した。私は新しい書物のプランを立てた。それは土壌だの、気候だの、総て歴史の出来事が成就された全環境の状況が展示され、「人」と「地」との協調が表明せられ、民衆の行動が大地の進化との調和的因果関係に於て説明されるようなプランである。

本書は、即ち今私が読者に提供するところのそれなのだ。

勿論、私は初めから知っている、どんな探究も私をして人類進歩の法則を発見せしめず、かえってその眩惑的な蜃気楼は絶えず吾々の視野に動き立ち、そしてなお再現する為に吾々から逃れて消えて了うことを。自分達の起原も運命も何も知らず、自分達が果して唯一の種族に属するか、或いは幾種もの人類が相次いで消滅しては再生するように生れたものかをも知らないで、無限の空間の中の一点として出現した吾々が、その不明な茫漠たる進化に、精密にして確定的な形式を与えようという希望でその諸法則を規定するということは、無法といふべきであろう。

だが、しかしながら、少なくとも、吾々は、暗黒な過去の中に考古学者の発見が絶えず延長されて行く長い世紀の道筋に於て、人間の事実の連続を地的諸勢力の作用に結び付ける緊密な関係を認めること

ができる。即ち、吾々は環境の変化に応合する諸民族の生活の各時代を時間の中に追究し、自然と人間そのものとの結合せる作用——それを形成した「地」の上に反動するところの——を観察することができる。

地球の総ゆる風景を静観すると、その無限の種々相や、常に活動している人種の諸勢力の作用がそれに与える調和やに、深く感動させられるものであるが、それと同じ香味は、幸または不幸の衣を纏うた、しかし、総て同様に「地」——人間を支え且つ養うところの——や天——人間を照し、またそれを宇宙の勢力に協合させるところの——と調和的ビブラシヨンの状態にある人間の行列を見て感じられることである。そして、諸地方の外貌は、吾々が全我全力を傾けて讚美する美的風光を限りなく吾々の前に開展するが、それと同様に、歴史の経過は、その諸事件の連続の中に驚くべき偉大な場面を吾々に示し、それを研究し認識することに於て人は自ら偉さを感じる。歴史的地理は、凡そ想像が喚起し得る総てのものを、比類なきドラマに、荘嚴なる実現に、集中する。

社会がさしも深刻な動揺の中にあり、進化の動きが迅速になって、眩惑せる人間はその生活方針を樹てる為に新しい立脚点を探し求めるといふ、危機の尖鋭化せる吾々の時代に於ては、歴史の研究は、絶えず拡張されるその領域が、益々豊富にして益々多趣な実例を提供するに従つて、益々尊い利益を与えるものである。諸時代の連続は、吾々にとって一大学校となり、その諸教訓は吾々の精神の前に自ら分るを生じ、そして遂には根本的法則に於て集合する様にさえなるものである。

歴史家が立証する諸事象中の第一の種類が吾々に示すところは、個人間及び社会間に於ける發展の不平等の結果として、如何に総ての人間団体が——原始的自然状態に存する民族は例外として——単に相違せるのみならず、むしろ利害と傾向との相反する、そして何時の危急の時代に於ても明白に敵対にさ

え立つたところの階級または閥にほとんど分裂するかということである。かくの如きは、風光や、気候や、また益々混乱する諸事象の錯綜やが決定するところの無限の多趣性を有する、そして多くの形態の下に、世界の総ての地方にて観察される、諸々の事実の概観なのである。

社会体分裂の必然的結果たる第二の綜合的事実は、個人と個人との、社会と社会との均衡が破れて、絶えず静止の中軸を中にして動揺することである。即ち、正義の侵害は常に復讐に訴えるものである。

それから顛動が絶えない。命令する人々は何時までも支配者であろうと欲し、然るに服従者は自由を回復する為に努力し、そして、自分達の飛躍の勢いに駆られて、自分等の利益の為に政權を樹立しようと試みる。かくて内乱は、対外戦や、鎮圧や、破壊やを随伴し混入し、連続せる紛糾となり、闘争の各要素の進出如何に従って様々に終局する。或いは被圧迫者が抵抗力を消尽して服従し、生命を成すところの発意力を持たなくなつて徐々に死滅して行き、或いは自由人の要求が勝を占め、そして事件の混乱の中に、眞の革命、換言すれば、環境の諸状態のより、明白なる理解力や、個人的発意の精力やに基づく政治的、経済的、社会的制度の变革が勃発される。

第三部類の事實は、総ゆる時代と総ゆる国に於ける人間の研究に附随するもので、諸民族生存の如何なる進化も個人的努力によらなければ、創造されるものでないということを吾々に証明する。国民の態度を變更するであろう諸事業に参加したり、諸思想を弘通したりする為の有意的行動と變ずべく運命づけられるところの、環境の強迫的衝撃を探究するには、社会の第一要素たる人間そのものの中に於てしなければならぬ。社会の均衡の不安定は、ただ個人の自由な拡充に対して負わせる束縛からでなければ起らないものである。自由社会は、第一の基礎的細胞たる各個人——それは、やがて集合して、自分の好むところに従つて、變易的な人類の他の細胞に結合する——に完全な發展をもたらすような自由

依って成立する。諸社会が価値を増し品位を高めるのは、個人のこうした初発的進展と自由との正比例に於てである。即ちこの世を建設しまた改造するところの創造的意思が生れるのは人間からである。

「階級闘争」、均衡の欲求、及び、個人の自主的決定、これ等は、「社会的地理学」の研究が吾々に示すところの、そして、事物混乱の中にも、これに「法則」の名を与えるに充分な不変性を現わすところの三種の事実である。これ等の法則を知り、そして既に知られ吟味されたる環境の諸勢力と調和するよう、自分自身の行動や、社会の共同管理に於ける自己の作為やを、これ等の法則に従って決定し得るということは、既に大きなことである。「歴史」の出来事を吾々に説明するものは、「地」の観察である。そして歴史の方は、また、地球のより、深き研究に吾々を導き、かくも微小にして同時に偉大な吾々個人を廣大無辺な宇宙とのより、意識的な連帯へと導く。

SAMPLE  
Shoshi-Shi.com

## 地的環境論

### 諸民族の生活の各時代は環境の変化に応合する

社会的事実の分類——寒氣と暑氣——乾燥と濕氣——山岳と高原——森林——島嶼、沼地、湖水——河川——海洋  
——環境の対照——人間自身が人間に対する環境である

**社会的事実の分類** 「地の諸形象の不同は人間の歴史を多趣にした」、そしてこれ等の諸形象は、無限に多趣なる環境に適応してその出来事を決定した（\* H. Drummond, "Ascent of Man"）。もっと簡単にド・グレフは吾々に言った。「生活は環境と応合する」と。更にイェリング（Ihering）はいう、「民族は全く地である」。

これは、今より二千有余年以前、ヒポクラテ（Hippocrite）〔紀元前四六〇年頃ギリシャ・コス島に生まる、最大の医学者——訳者〕がアテンの門弟達の前に於て、既に創成したる「環境に関する科学」即ち環境学の基礎的原則である。彼が言い出したその一般的諸事實は、爾来モンテーニュ（Montaigne）やボダン（Bodin）やモンテスキュー（Montesquieu）のような諸学者によつて反覆されまた敷衍された。しかしながら、それは諸事實に対して精確な觀察を施したものでなく、彼等の注意は、これを地理や歴史の領分に嚴肅に適



用することなしに終った。そして、未だ「科学」と称せられるの価値はなかったが、ともかくその名を負うて、このような観察を始めたのは十九世紀であった。少くとも、ユダヤ、ギリシヤ、イタリー等の諸民族の歴史的起原を決定すべく探究したる諸環境は、立派な専門的詳記を以て描かれた。

人間に対する「自然」の影響を単に一般的方法にて認識しただけでは満足することは出来ない。環境の各特殊状態に於ける影響を各別に検証することがまた同様に必要なのである。また近代に於て、諸学者は、人類に及ぼす多少著しき決定的諸作用を分類するために、最も精巧に更に最も熱心に、諸事実を分析することに専心した。

ル・プレー (Le Play) の学派は、人間の活動を制定する諸能因を分類する為に努力したことに於て殊に有名である。そしてド・トゥルヴィル (de Tourville) 氏は師の事業を發展して、総ゆる能因の分類表を作製した (\* "Science sociale", t. II, pp. 502 et suiv. : —Edmond Demolins, "Les Français d'aujourd'hui", pp. 431 et suiv.)。この学派では、この表を以て、「化学がその術語集に負う処多大なのと同様に、諸社会学に大なる刺激を与える処の研究用具」、「最も複雑なる諸社会を精確に迅速に分析するに便利な完全貴重な用具」と見做している。

これは甚だしき過言である。即ちこの用具は既に知られたる社会的集団を研究する目的を以てこれを使用する者には最も高価な利益を与えるのであるが、その探究にして地方の地理及び歴史に関する詳細な智識に基きこれに従つてこれを使用するのでなければ、この用具は頗る危険なものとなる。何となれば、事実の軽重は、何時でも、同じように、規則的の順序に於て現れるものではない。事実の軽重は、何時でも、到る処に各民族各人に対して、自ら異なるものである。ここに於いては、人間の大嚮導者は、寒気や、暴風雨や、波浪やであるが、余処に於ては、好い太陽であり、暖い微風である。

ド・トゥルヴィル氏による分類法は、社会事実を二十五種の名称に分けている。それに就いて先ず第

一に驚くべきことは、この表に於て、総ゆる人間がその開発状態の如何に拘わらず一様に服従する処の諸条件と、単に近代人にのみ通用せらるべき諸条件との間に差別を設けなかつたということ、これである。

けれども、人間が避けることの出来ない自然の諸事実と、人間が免かれ或いは全然無視し得る処の人為世界に属する諸事実との間には、氣付かるべき明白な差違が存在するのである。土地、氣候、労働及び食物の性質、血統及び婚縁の關係、集団の方式等は、各人間の歴史にも、また各動物にも、感化力を有する原始的の事実である。然るに、俸給とか、保護とか、商業とか、国の区劃とか、いうようなことは、原始時代の社会のいささかも制束されなかつた処の第二義の事実である。勿論、生存の人為的部分が、個人に於てしばしば生活の自然的条件となることは争われない。けれども一般的性質を有する分類法では、原始住民に決定的作用を行つた原始的環境を第一列に置くべきであるのは無論である。研究の順序は、静力的環境を先にし、動力的環境の調査はこれをその次にせねばならぬ。

\*

**寒氣と暑氣** その原始的要素として、冒頭に置くことがたしかに適當なのは、温度の現象である。けれどし極端な寒氣も暑氣も共に或る時は致命的作用をなし、又その直接作用としては土地を乾燥し或いは湿氣を醸成するのである。ここに掲ぐる統計図(統計略)は、氣候が地球の表面に人間を分配する有様を明白に、一図面に示すためである。即ち氣候温暖の地方や、充分灌漑の便ある熱帯地方に於ては人口が極めて稠密し、これに反して、寒帯地方にては住民が極めて稀薄であつて、更に人間の生存熱度を保持すべく余りに酷寒な地方にては絶対的に無人の境が出来る。

大体に於て、人工稠密の度を一キロメートル平方内の平均住民に就いて看るに、その比較は実に氣候の比較と一致するのである。即ち兩極の方面に就いて言へば、零度の等温線はほとんど精確に自然が人間に対して劃した生存可能限界線と一致する。北方に於けるほとんど総ての無人島は、何れも、霧霰氷雪を有する酷烈な氣候の北極或いは準北極の沿海にある。地球の革命により、或いは他の人間のために追われた移住民は、本能的にこの恐るべき地方に面するや直ちにここを退却し、然らざれば、この酷烈な環境に適應するの時間を有せずして消滅した。然もこのような地方に於ても、無数の遊禽類が遺した肥料層に蔽われた特別形勝の場所にては、種子の萌芽が迅速に五メートルの高さにも及び、開花するに至る (\* Hermann G. Simmons, "Etudes botaniques de l'expédition Sverdrup", La Géographie, 15 février 1904)。エスキモーの家族は、北極より千三百キロメートルなるエタ(或いはイタ)の營舎のある北方にて生活する。旅行者ピヤリー(Pearle)はその探見遠征に際し、この家族に伴われてなおこれよりも頗る北方まで到達した。南方に於ては、人類代表者が赤道を遠ざかつて歩を進めた程度は北方よりも甚だしく、南極から三千八百キロメートルの「火の陸」に於て、海によって抑止された。

地球の兩極に於て、もしその諸島嶼を人間が忌避するとすれば、それが寒氣の為であることは明白ではないか? そしてこの場合に環境の決定的強制力を否定することが出来ようか? 科学の助けによつて幾分の自由力を得た人類が、氣候の束縛からいささか免れるために努力を集合するに至つた以前には、人類の如何なる代表者も、かの昔のカルデヤの楽園よりも能く防護された北極酷寒地方において、エスキモー人の小蟄居地より奥に進入することは出来なかつた。人間はその先天的能力を準備すれば、環境から全然独立自由であろう、という学説は事實の觀察と全然一致しない。ゴビノー(Gobineau)は「総ゆるる思想、総ゆるる傾向、総ゆるる努力を、ここに至らしむる為には、最も純粹な、最も明敏な、そして最も

強壯な白人団が、不可克的境遇と対立して、兩極の積雪の底か、赤道の日光の下かに生活したら、それで充分である」(\* "Inedgite ter Races")と言ったが、何人もこの語を再び口にすることは出来ない。実験は、この無鉄砲な主張に取消を与えた。現に最近、ゴビノーが総てを超越したものと称揚する人種に属する旅行者を以て組織された探検隊は遂に自ら食人動物と化し、更に餓死をさえ急ぐに至った。公けの調査者が、この悲惨な出来事に就いていささかこれを漏示したのは正しいことである。

エスキモー或いはイヌイ、換言すれば北米の「人間」は、ヨーロッパのラボン人や、アジアのサモイェド、及びチュクチや、と同様に、皆その身体に、又その生活法に、寒気に打克つ作用を明示する証拠を持つている。第一に彼等は少数である。これはその住居する北極地方が、大部分積雪に蔽われて、ために土地が供給する生活資料の乏しきに由来する。グリーンランドの東岸からシベリアのチュクチ地方まで、東西七千キロメートル内外の地面——即ち二千万キロメートル平方もあつて、丁度フランスの二十倍の広さを持った地方——に於て、僅かに五万の純血及び混血エスキモーが生活するのみである。その内で、歐人の世界から全然隔離して純血を保持した土着民は僅かに一万五千を越えない。さればエスキモーの国は、他地方に比すれば、四、五千分の一の人口を有するに過ぎない。

極北に於ける住民はかく稀薄なために、或る所に於ては各集団は全然孤立して、互に他の住民の存在を知らない程である。例えば、スマイス海峡「グリーンランド西北方——訳者」とパレオクリスチック海との間の、北方の淋しい氷結地方を漂泊する二十人許りのグリーンランド人の一隊の如き、これである。一八一八年に、ロッス (Ross) がメルヴィル湾の北方エタの海辺に於て彼等に遭遇した時、彼等は自分等以外の人間を見て呆然たる有様であつた。そしてロッス達を月の世界から降つたものか、或いは地の割れ目から昇つた人間か、何れかだと思つた。即ち彼等は、自分達のみで人類全体を成すものと想像したのであ

II

エリゼ・ルクリュ

思想と生涯

石川三四郎 著

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序文

エリゼ・ルクリュ（一八三〇年生）を伝することは、私の喜びでもあるが、また内心苦痛でもある。というのは、エリゼ自身多くの人の囑望に係わらず、「自伝など書けない」とて筆を執ろうとしなかったし、その相続者ポール・ルクリュがまた、「エリゼ自身が書かなかったものを、私が書く訳には行かない」とて他の希望をしりぞけた。そのポールの弟子格である私が、この冒険を敢えてするのであるから、私の内心が平かでないのは当然だ。けれども西欧から遠く離れた、人情風俗の非常に異った日本の社会に、この異色ある人物を紹介することは、また言い知れぬ喜びでもある。ルクリュ一族に対しては冒瀆であるかも知れないが、日本に対しては勲功であるとも言えよう。

私は最初の滞欧八年間の内、七年間はルクリュ家の家族となつて労働と学究とに指導を受け、次で大正十二年、ルクリュの「地理学研究所」の図書全部を日本に持って来た。しかるに不幸にして、その六万巻の書はなお深川の倉庫にありし間に、かの関東大震災のために烏有に帰して了つた。この大災禍をフランスのルクリュ家に報じてやると、ポール氏は「噴火山の讚美者であつたエリゼの片見が震災で焼けたとはいかにもふさわしい成行ではないか」といふ返辞をよこした。

こうした間柄であるから、私がルクリュを書くとなると、どうしても頌めすぎたり、我田引水になつたりするであろう。そう考えて、私は努めて我意を挿入することを避けた。そして他の人の感想や、

ルクリュ自身の手葉を成るべく多く引用して、読者をして自らルクリュという人物の全貌を想像し、感得し、諒解せしめるように用意した。そのために或いはいささか廻りくどい所があるかも知れないが、しかし、ルクリュの行動と言葉と腹とを透視しようとする読者のためにはこの準備が必要だと私は考へる。

エリゼはバクニンの親友であつたジャコヴスキーがユトピヤの熱心な追求者であることを紹介するに當つて、「ユトピヤこそ現実そのものだ」と言つてゐるが、自分でもユトピヤ郷建設の志望を懐いて随分努力し、一生涯その志を棄てなかつたらしい。社会革新の必須条件としてユトピヤ的建設の重要性を認める思想がこの頃ようやく盛んになりつつある時、彼がその文筆的勞作に追われて、理想郷建設の志望を達成しなかつたことはいかにも惜しまれるが、彼の意図こそは眞に科学的であつたと言えるであらう。なぜなら、一つの原理からその応用に到達するには、先ず実験を重ねることが科学の方式だからである。故に社会革命の科学的方式としてはユトピヤこそ現実問題なのである。ルクリュ伝を世に送るに當り、この一言を附加して置く所以である。

昭和二十二年十一月十一日

不尽草房孤灯の下に於て

石川三四郎識

SAMPLE  
Shoshi-Shisu.com

## 人物

エリゼ・ルクリュ (Elise Reclus) は第十九世紀の世界が生んだ最大人物の一人だと言われる。十九世紀に於ける人類解放の多くの革命運動に関与して絶倫の精力を発揮し、殊に無政府共産主義の発案者、大先達として世界の進歩的青年の崇拜的敬慕を一身に集め、人文地理学または社会地理学に於ては古今独歩の碩学と称せられ、或る時は銃を執ってバリケードに立ち、或る時は祖国亡命に際し、理想郷建設の雄図を抱いて、アイルランドに、北米に、南米に刻苦辛酸、具つさに鋤の激労に堪え、或る時はペンとノートとを懐にして野に臥し山に寝ね、或いはアルプスの峻嶺に、或いはピレネーの幽谷に、或いはエトナ、ベスピアスの噴火口に、踏査探検の壮挙を敢行し、或る時は北米に於ける黒奴制の暴状に憤激し、一大論文を『両世界評論』に掲げて世論を喚起し、大統領リンカーンをして感激措く能わざらしめ、或る時はパリ・コンミュンに対する軍法会議に於て終身遠島の刑に処せられ、欧米学界人をして一大抗議を仏国政府に呈せしめ、バクニンをして「彼は無神論者にしてしかも宗教的聖者なり」と讚美せしめたエリゼ・ルクリュの生涯は、まことに一篇の雄大な詩であり、詩劇である。更にまた、彼は単に学者、革命家として偉大であったばかりでなく、その精彩ある自然描写の文芸は、卓越せる散文詩家として彼の名声を一世に馳せしめた。八面玲瓏、精力絶倫、しかも純潔にして謙虚、功成つて居らず、七十余歳の大労作を終る時、彼は相続者唯一人に遺骸の埋葬を嘱して静かにこの世と別れた。それは、まことに



「落花不語空辞樹」という光景であった。

彼の長い一生涯中、最も激動的な瞬間は、何と言つてもパリ・コンミュンに関与した時であろう。一八七〇年に仏独戦争が勃発し、間もなくパリが独軍に囲まれて、仏国仮政府と独軍との間にヴェルサイユ会議が行われている際に、パリ市民はヴェルサイユ政府に対抗して有名な「パリ・コンミュン」の自治宣言を發布した。エリゼは兄のエリー（Elié Reclus）、弟のポール（Paul）と共に、この自由軍に武器を執つて参加した。しかし、このコンミュンはヴェルサイユの反動政府軍のために撃破せられ、彼は多くの同志とともに逮捕せられ、危く銃殺を免れて刑務所から刑務所へと引廻された後、残虐極まる無期流刑に処せられた。この時だ、世界文化史上に未だかつて見られなかつた有名な抗議が、諸国の学者達の連署を以て仏国政府に差し向けられたのは。それは英国のダーウィンや、ワレスを始め、カーペンター、ウィリアムソン、ロード・アンベリー等が発議して世界諸国の知名の学者達がこれに連署したものである。その抗議文の中に次の如き数句がある。

「吾々は希念する、その文学及び科学の為に寄与した功績を既に一般から認められたエリゼ・ルクリュ氏の如き人物は、将来その精神の熟達によって、必ずや一層偉大な功績を樹てるに相違ないことを。われわれは考える、このような人物は、単にその生れた国のみならず、全世界に属するものであって、こうした人物を沈黙の中に幽閉したり、文明の中心から遠く僻陬の地に送つたりするならば、フランスは、世界に与える自分の正当な感化力を自ら殺滅するに外ならない」

世界各国の学者、知識人が、かくも多数にて、良心の世界的協力を人道の名に於て声明したことは、実に世界文化史上に最初のことであつて、さすがのフランス政府も、その圧倒的精神威力に抗すべくもなく、遂に彼の刑を減じて十年間の追放ということにした。彼は軍法会議に附せられた時、出陣中か

つて一弾も発砲しなかったことを法廷で陳述したが、法官は執拗に追究して、「しかし、もしかかかくの場合にはどうするか？」と問うや、彼は直ちに答えて「その時は私も諸同志の如く発砲したであろう」と云い放った。この Kommun 国立図書館管理者となった兄のエリーは、弟達とともに出陣したが、Commun 軍の瓦解と同時に脱走し、エリゼの法廷に於ける態度を聞いて次の如く書き送った。

「ファンニー〔エリゼの妻君……石川〕の二語、ただの二語によって、君が流刑に処せられたことを知った。」

「わが愛する友よ、これは君の生涯にとって重大な一時機だ。君はフランスの面前に於て、一人の男子だという証言を、軍法会議によって与えられたのだ。君は銃殺の前に立ちて、牢獄の中に於て、また流刑に遭遇して、何時も断乎たる威敵を保ち、正直で、誠実で、義勇であった。君は常に平静に、且つ思う存分に行動した。フランス社会の地獄幽囚七ヶ月を経ても、彼等は君を汚すことも、貶すことも、できなかった。醜汚、陋劣な行動を以て穢されている彼等の世界を睥睨して、君は常にこれに真正面から立ち向った。しかもなお彼等は、君をいささか痛めつけることはできたかも知れないが、君を挫折せしめることはできなかった。君はたしかに良心そのものだ。本当に、私は君に対して不満を持たない。立派なエリゼ！……」

「実際に君は、あの空威張りする帯剣の卑劣漢どもに対して厭悪の苦笑を浴せ得るのだ。あの軍人どもは、わが不幸な哀れむべきフランスに、歴史上最も卑劣な打撃を加えた後、共和主義者を圧殺し、労働者を塵殺し、その血を以て自分達の汚点を洗滌しようとしたのだ……」

「結局、君は刑の宣告を受けた方が、吾々の道のために善かったのだ……君は共和制と Kommun とを守護した。そしてあのサン・シリヤンやファイガロチエ〔軍人や保守政治家……石川〕の徒輩は君を流

刑にする、君を知り、彼等を知るものにとつては、それで充分だ。」

「君、何よりも大事なことは、不幸に打ち勝つことだ。彼等は君を、荒れ狂う海中に投じたが、しかし君は游泳の猛者だ、常に頭を大波浪の上に支えよ。」

「四面の壁の中で、きつと君は体操をするだろうか？ それをより多くするように、より多く食事することだ。神経の流動に注意してくれ、君の健全な精神が、君の身体を健康に保つよう。善良なエリゼ、では行けよ、また会う日まで。」

これはエリゼの最も親しい同志にして、最も尊い兄から送られた訣別の手紙である。少年時から七十余年の長い生涯の間、影の形に添うが如く、常に生活をともしにした、このエリーとエリゼとの兄弟愛は、世にも珍らしい美談として、今も広く知人間に言い伝えられている。エリゼは一たん無期流刑の宣告を受けたのであるが、前述の如く世界的抗議が起つて、そのため減刑されて十年間の追放となり、彼はスイスを選んでこの国に亡命した。そしてエリーとエリゼの兄弟は、ここにまた互に接近して居を卜するに至つた。

\*

私はここに、エリゼ・ルクリュの人となりについて、なお少しく序述しなければならぬ。一八九二年、即ち大地理学第十九巻が出版された年に、クロポトキンの『パンの略取』が公けにされた。そしてエリゼはこれに序文を書いた。ブルツェル新大学の総理ド・グレフ博士はルクリュ追悼講演中にこの『パンの略取』に言及して次の如く言っている。「同著者（クロポトキン）の最近の著作である『相互扶助論』に依つて最も該博に最も明瞭に無政府主義の原理が創定せられたのである。かくの如くこの二人（ル

クリュとクロポトキン)に依つて、即ち最も平和的な、最も人道的な、いささかの暴力行為をまなし得ない様なこの二人に依つて無政府主義の教義は開発せしめられたのである。實際あの二人は、私の一生涯にかつて出会わない極端に優しすぎる人達だったと言ひ得よう。その著書を読み、その言葉を聴いていると、自ら自分が善人になる様に感じられる。これは実に、彼等の自然に対する甚深な愛、殊に人間の天性、人間の威厳に対する愛、全人(最も墮落した人に対してさえ)に対する深愛に基くものである云々。」

＊

現代の桶仙人(ディオゲネス)として、名声の高いフランスの詩人アン・リネールはエリゼ・ルクリュを語る講演に於て次の如く言っている。

「一八八二年七月八日、彼はリシャル・ヘスに素晴らしい言葉を書き送っている、『人間と動物との間には、人間同志の間に於けると同様に、愛情を以てする以外に正義は生れない』と。

それから二十二年の後、老衰の彼の生涯の終りごろ、一通信者は彼の古い著作中に人類軽蔑の文句を発見したと告げた。エリゼ・ルクリュはこれに抗議する。彼の感情に浮流状態や動揺状態のある場合、それを無視すべく彼は余りに真摯、余りに清明である。しかし、彼は言う、『種々な動揺は、人間のはげしい愛である引力の中心に常に私を導く』と。やがて彼は不安になつて説明する。

『私の著作『或る山の歴史』の初めの部分には、或る欠点即ち真实性の欠如が潜んでいはいはしないかと思ふ。私の記憶する限りに於ては、私はあの時「書いた時……石川」獄中にいた、その上、私の周囲にほとんど不可通の厚い壁、即ちあのコンミュンとコンミュン一味とに対する全世界の憎悪を感じた。恐らく、それが私を硬化し、そしてこの動揺が私の自然を打破したかも知れない。』

かくの如く、彼は、われわれが瞬間の真实性と呼びたいところを、真实性の欠如と呼んでいる。およそ彼の表現で、彼の心奥、彼の愛の放射から出ないものは、彼は悉く切情を以て否定するのである。

たぐいなき特異な例だが！ その努力と硬直とが、ただわれわれの自然の冒された美だと言い得る瞬間が存在しはしないか？

ああ起ち直る崇高さ！ 私は前に、彼が獄中から書いた言葉を引用した、曰く『私は運命が私を打撃すればするほど自ら自負せねばならぬ』。この専横に対する嫌悪の自負心は、決して不幸な同僚の上に注ぐ優情と慈愛とを妨げない。あらゆる文献はわれわれに示す、彼はその力を以て屈服せられた弱者を支え起し、彼の持った乏しきを無一物の人々に分け与えたことを。

讚美すべき均衡、そして運動に於て、『輪廊を變ずる運動』に於て、生々した美を累積する。彼の豊富さは、その防禦的態勢に於て、或いは同志への援助に於て、全く尽きるということがない。衝突の下に直立して、その愛を汎放するだけでは彼は満足しない。彼はなおその上に心臓と精神との満全の健康を保持することを得た。彼は地下獄の底にまでも、その唇に良識の逆の花を浮べ、明朗をもたらずのであった。――

\*

エリゼ・ルクリュの研究又は讚仰の文献は数限りなく発見されるが、彼の人物の全貌を把握することは容易でない。或るものは彼が余りに宗教的自粛の生活を一貫したことを非難し、或るものは彼が右手の為すところを左手に知らしめぬという純愛の態度を非難した。何か他を非難せねば満足し得ない当時

の若者たちの言動は素より彼の人格を傷つけるには至らなかつたであろう。否なそれはむしろ、蝶々や蜜蜂が花の色香に酔うて飛びまわるように、彼の人格の豊かな色彩と芳香とに眩惑して、知らず識らずそれにもつれ附くようなものであつたのである。

オーストリアのピエール・ラムスはその先輩ヨハン・モストの語を引いて『Eliséc and Elie Reclus in Memoriam』（ジヨゼフ・イシル編集発行）中に次の如く書いている。

「私は決して忘れることができない。私を最初に無政府主義に導いてくれたヨハン・モストが、一八八〇年頃ニュー・ヨークに彼を訪問したエリゼ・ルクリュの人格に就て、どんなに深い感激を以て私に書き送ったかを。

私（モスト）が『フライハイト』の編集室で、ものを書こうとしている時、突然私の肩をたたくものがある。いらだつて振り返って見ると、年をとつた、身のひくい一人の男が立っている。しかもその眼は親切と友愛とに輝く特殊な光を放射している。

最も平凡な訪問者であるかのように、いささかの勿体ぶりも高慢ぶりもなく、彼は言う、『私はルクリュです。』

彼は極めて謙遜につけ加えた。『御免なさい。お妨げして。』

僕は君に言うことができる、こうして妨げられたことは僕にとってまことに幸福であつたと。僕はエリゼ・ルクリュを抱擁した。彼とともにいた数時間の楽しさというものは、僕の生涯に於て最も幸福な最も輝かしい瞬間の中に加えられる。彼の全人格は激励そのものである。彼の眼は宇宙に透徹し、労働者の解放のために闘うものは宇宙的威力と調和し一致するという感じを与える。エリゼ・ルクリュは僕が無政府主義者になつて以来の最大の鼓吹者の一人である。

モストが彼を通して感じたことは、すべて人類がエリゼ・ルクリュに負うところのものである。彼は人類知識の聖壇に清明な思想と崇高な抱負との果実を供えた。無政府主義運動は、その最も輝ける高尚な風貌を彼によって添えられた。彼が『理想と青年』に就てのパンフレットに表現せるものの何と美しいことか。エリゼ・ルクリュはその偉大な頭脳と剛強な天性とを以てわれわれの全国際運動に与えた、その自由の理想の勝利に於ける久遠の若き頑強さを。」

\*

エリゼ・ルクリュの人物を紹介すべく、私は方向の異った三人の言葉を借用した。ド・グレフも、アン・リネールも、ピエール・ラムスも、更にラムスが引用したヨハン・モストも、いずれも各自が占める分野に於て第一線に立った人々である。ルクリュを讚美し敬慕し、またはこれに私淑する学者、知識人、文芸家、修道者は今全世界に数限りなく潜んで又は活躍している。私は、それ等の人々の所見を一々ここに紹介する訳には行かない。大山は登るに従って姿を改め、遠近に従って光彩を変更する。望見する者の脚地と識見とに従ってエリゼ・ルクリュの人物観も自ら異なるであらう。読者こいねがわ希くは各自独自の観点を自覚しつつこの巨人の風姿に対峙しまた親接せられんことを。

SAMPLE Shoshu.com

## 社会状勢

エリゼ・ルクリュの生れた一八三〇年前後はヨーロッパ諸国の社会動揺期であった。ナポレオン戦争の結果、欧洲諸国には保守的反動政治が一時勝利を占めたように見えたが、これに対する急進的煽動運動もまた処と時とに応じて到る処に爆発した。

先ず英国に就いて見るに、ナポレオン戦争の結果、英国の欧洲大陸への輸出額と国家の債務とは激増し、やがて富豪と工業家との権力と金力とを増強し、それに対比して、労務者の賃銀は減少した。麦の市価は急激に高騰し、大工業の勃興に連れて労働者群は激増し、賃銀生活者の生活難は言語に絶するものがあつた。一八三〇年頃の英国産業都市に於ける労働者の困窮はその極に達した。その当時の状態はディケンスの『困窮時代』によく描写されている。ロバート・オーエンが共働組合を提唱し、各種職業労働者の結合を図つたのは、この時分のことである。一八三一年に政治的革命運動に傾いた運動もその翌年には再び純労働運動となり、一八三六年には彼の提唱の下に全国労働者の大組合が組織せられ、その組合員はやがて五十万という多数に上つた。その目的は、議會をして八時間労働制を議決せしめるために総同盟罷工を断行するにあつたと言われる。

保守的反動の中心はむしろ欧洲大陸の東部にあり、オーストリアの宰相メッテルニヒや、ロシアの皇帝アレクサンドル一世がその主脳であつた。従つて大陸諸国の保守的政策が厳酷であつた為に、これに